

自由図書部 次点

池添朱音さん 経済学部経済経営学科1年

『湯を沸かすほどの熱い愛』

中野量太著 / 文藝春秋

「愛は愛を生み、そしてまた戻ってくる」

あなたには、愛する人がいますか？あるいは今、あなたは誰かから愛されていますか？“愛”と聞いて大多数の人が、それは優しいもので、家族や恋人、友人との間に存在するものだと考えるだろう。しかし、実際はそれだけではない。本書は、この世界にはさまざまな愛のカタチが存在するというのを、私たちに教えてくれる。

銭湯「幸の湯」を営む幸野家は、夫である一浩の蒸発を理由に銭湯を休業していた。妻の双葉はパン屋でのアルバイトで生計を立てながら娘の安澄を育てていたが、ある日末期のがんが見つかり、余命二か月を宣告される。双葉はその宣告を受け入れられず途方に暮れたが、残された時間でやらなければならないことをやろうと立ち上がる。それは、夫を連れ戻し、銭湯の営業を再開させること。そして、いじめに悩む安澄を独り立ちさせること。

この本の主人公双葉は、時には優しく、時には厳しく、これでもかってほど人を愛した。浮気した夫、本当は夫と元妻（君江）の子である安澄、夫と浮気相手の子である鮎子、そして道の駅で偶然出会った見知らぬ男の拓海。言ってしまうと、双葉と血のつながりのある者はこの中にはいない。夫の一浩にいたっては、浮気によって双葉を深く傷つけた。しかし双葉は、そんな過去を一切感じさせず、常に彼らのことを気にかけた。

はじめは皆、その双葉の愛を素直に受け入れなかった。実際に一浩は、その愛情に背いて浮気をしていたし、鮎子は本当のお母さんではない人から優しくされることに、どこか不信感を抱いていた。いじめを受けていた安澄は、現実から逃げちゃだめだと厳しいことを言う双葉に、泣き叫び反抗をした。

しかし、ひたむきに愛し続ける双葉の姿を見て周りには心を動かされていく。夫はまた双葉のもとに戻り銭湯を再開させると決め、鮎子も次第に心を開いていく。安澄も勇気を振り絞って学校へ行き、見事にいじめに打ち勝った。

双葉の愛は、最初は一方向的だったかもしれない。しかし、次第に皆に受け入れられた。そして最終的には、誰もが双葉のことを大好きになっていた。双葉の愛は、ちゃんと皆に届き、そして彼女のもとにまた帰ってきたのだ。情けは人の為ならず、とは少し違うかもしれないが、まるで愛が循環しているように感じた。

本書に出会うまでは、愛がここまで人の心を動かすなんて思ってもいなかった。というよりも、わたしは人を愛するという意味を理解していなかったのかもしれない。今の自分にはまだ、人の心を動かせるほどその人を愛せる自信がない。しかし双葉のように誰からも愛される人になりたいから、わたしも彼女のような生き方をしたいと思う。皆さんも本書を読み、素敵な愛の在り方に是非とも触れてみてほしい。